シェイクスピアの聖地を破壊した男
―フランシス・ギャストレルの「蛮行」

中野春夫

今日、シェイクスピアの名残りを直接とどめるものは、故郷ストラトフォード・アポン・エイヴォンの墓と生家など、ごくごく限られている。『トマス・モア』の手稿に残された推定上の加筆箇所を除けば、劇作品の原稿もすべて散逸し、作品を上演した芝居小屋も残ってはいない。ウィリアム・シェイクスピアは晩年の5、6年間をニュー・プレイスと呼ばれるストラトフォードの屋敷で過ごしたはずだが、その家屋も庭園も今はない。シェイクスピアがここで座っていたとか、ここで妻や娘たちと会話していたなど、歴史・文学マニアのロマンティックな空想を誘う聖遺物は、残念ながらごく限られている。

本論の対象は、この250年間、シェイクスピア愛好家たちの怒りを一身に浴びてきたある人物の「蛮行」である。本論は、シェイクスピアの生地で起こった狂騒劇を検証することによって、私たち研究者が目をそむけてきたシェイクスピア崇拝の陰湿な一面を紹介してみたい。

1. 桑の木伝説とニュー・プレイスの倒壊

O. J. キャンベルと E. G. クインの共編による『リーダーズ・シェイクスピア百科辞典（*The Reader's Encyclopedia of Shakespeare*）』（1966年）は、シェイクスピア辞典の草分け的な存在であり、その当時第一線で活躍

していたシェイクスピア研究者たちが各項目を担当したという点で、今日でも調査の出発点として有益な資料である。その中で「フランシス・ギャストレル」の項目は、以下のように記述されている。

> フランシス・ギャストレル（活動期 1756–1758）チェシャーのフロシャム教区牧師。1756 年に、ギャストレルはシェイクスピアの住居であったニュー・プレイスの敷地に 1702 年に建て替えられた建物を購入した。1758 年に、旅行客にいらだったギャストレルは、シェイクスピアが植樹したと伝えられる桑の木を伐採し、敷地から取り除くよう命じた。翌年の 1759 年、ギャストレルはニュー・プレイスの建物すべてを倒壊させ、ストラトフォードの町民や，この時期から存在していたように思われるシェイクスピア崇拝者たちの悲しみと怒りの的となった。
> Gastrell, Franscis（fl. 1756–58）Vicar of Frodsham in Cheshire. In 1756, Gastrell purchased New Place, a house built in 1702 on the site of the original New Place, Shakespeare's home. In 1758, irritated by tourists, he ordered the removal from the property of a mulberry tree which had allegedly been planted by Shakespeare. The following year, Gastrell had the entire building destroyed, to the dismay and outrage of the citizens of Stratford and other Shakespeare idolators, who seem to have been in evidence even at this early date.　（*The Reader's Encyclopedia of Shakespeare* 255）

ここで言及されているのは、シェイクスピア崇拝者の怨瑳を一身に受け続けてきたフランシス・ギャストレルの破壊行為である。日本にも同様な体裁の『研究社シェイクスピア辞典』（2000 年）があり、その中の項目「ギャストレル」（179）と「桑の木伝説」（217–18）は上記の情報をもとに記述されている。

「失われた年月（Lost Years）」の用語で知られる 1585 年 2 月から 1592

年6月まで、シェイクスピアの消息はまったくの空白になるが、それ以前の20年間に関しても、シェイクスピア本人と関わる公的文書は彼自身の洗礼記録（1564年4月26日付）と婚姻特免状（1582年11月28日付）に限られている。経歴の空白があれば、空想をめぐらせたくなるのはいつの時代でも変わりはない。劇作家としてロンドンで確固たる地位を形成する1592年以前については、後段で紹介する通り、17世紀と18世紀を通じて、数多くのフェイクニュースや典拠不明の怪しげなエピソードがまことしやかに語られていた。

ウィリアム・シェイクスピアは1590年頃にロンドンの演劇界にすい星のごとく現れ、サミュエル・シェーンボームが指摘するように、1594年に宮内大臣一座の株主となってかなりの資産を築いた（シェーンボーム261–63）。投資家としてシェイクスピアが最初に目を付けたのが、生まれ故郷のストラットフォードで「2番目に広い」不動産であった。飛ぶ鳥を落とす勢いの劇作家はこの物件を1597年5月に購入し、新たにニュー・プレイスと名付けたうえで、「自らの好みに合わせて修繕し、建て替えた」（Theobald xiii）。シェイクスピアは、現役中はロンドンの下宿とこの邸宅の間を行き来したようだが、1612年頃と推定される引退後はこちらで過ごし、1616年4月23日にこの屋敷で息を引き取った。

ストラットフォードには、今日シェイクスピアと関連する数多くの観光名所があるけれども、シェイクスピアの実生活を肌で感じることができるものがあるとすれば、まさしくニュー・プレイスが聖地であるはずだった。「だった」と過去形なのは、ギャストレル牧師が伐採した桑の大木こそ、シェイクスピアが遺した最後の聖遺物だったらしいからである。シェイクスピアの直系卑属は1670年に孫娘のエリザベス・ホールが死去すると完全に途絶え、同時に豪邸ニュー・プレイスも、かつての所有者であり地元の名家であるクロプトン家に売却された。シェイクスピアが「自らの好みに」リフォームしたと伝わるテューダー朝様式の建物全体も、1702年に当主サー・ジョン・クロプトンによって取り壊され、新古典様式のカント

リーハウスへと生まれ変わった（Halliwell-Phillipps 201；シェーンボーム 376）。この時点で、シェイクスピアが日常的に使用していたゆかりの品々は家具類を含めてすべて四散し、唯一シェイクスピア時代そのままとされていたのが、庭園の一部と桑の大木であった。

今日の感覚からすれば、サー・ジョン・クロンプトンによる 1702 年の完全リニューアルは文化遺産に対する信じがたい冒瀆である。ただし、クロンプトン家は 15 世紀からストラットフォードの地域行政とギルドを支配する有力者一族であり（Carpenter 65）、サー・ジョン・クロプトンが自宅の改装にあたって周囲に遠慮する必要はまったくなかった。

また、サー・ジョンにシェイクスピアの文化財保護という意識がなかったらしいことは、18 世紀初めにおいて、シェイクスピアの知名度がほぼないに等しかった事実を如実に反映している。第 3 節で紹介するが、1700 年前後の時期では、まだシェイクスピア・ブームと呼べる現象は発生しておらず、シェイクスピアとその劇作品はそれで一儲けできると確信できるようなビジネス・コンテンツではなかった。もちろん、インチキ・グッズやインチキ聖地で大儲けという発想も、17 世紀には生まれようがなかった。ギャストレルが破壊者の汚名を一身に引き受けてはいるが、ハリウェル＝フィリップスが断言する通り、シェイクスピアのニュー・プレイスを取り壊したのはギャストレルではなく、サー・ジョン・クロンプトンである（Halliwell-Phillipps 220）。

先に示した『リーダーズ・シェイクスピア百科辞典』の記述を補足すると、伝統的に語り継がれてきたギャストレルの蛮行は以下の通りである。1758 年のある時期、フランシス・ギャストレルは、自宅の庭園に押し寄せる大勢の見物客にいらだっていた。資産家のギャストレル牧師は、2 年前の 1756 年にストラットフォードの中でも指折りの豪邸ニュー・プレイスを購入していたが、ギャストレルのいらだちの元は庭園に植えられている桑の大木であり、この樹木はシェイクスピア自らが、劇団のパトロンであるジェイムズ 1 世の養蚕提唱に応じて植えたと伝わる、ストラットフォ

ード自慢の記念物であった（Malone（1821）118–19）。押し寄せる観光客たちに堪忍袋の緒が切れたのか、ギャストレルは桑の木を根元から伐採し、トマス・シャープというストラットフォードに棲む彫刻職人に薪材として売り払った。最初のインチキ・シェイクスピア記念グッズと認定できる観光お土産品が、この由緒正しい1本の「桑の木」材から、1759年からシャープがこの世を去るまでの30年間にわたり製造され続けた（Halliwell-Phillipps 227–30; Wells 121）。

フランシス・ギャストレル夫妻は元々ストラトフォードから遠く離れた、リヴァプールやマンチェスターに近いチェシャー州フロシャムの牧師であり、ストラトフォード町民からすれば金持ちのよそ者である。夫妻はニュー・プレイスを購入した直後から隣接する飛び地の借地権を次々に取得していき、町民たちの目にも、夫妻の目的が不動産投資にあることは明らかであったはずである。一方、ギャストレルを悩ませたとされる見物客たちは、もしそれが事実であったとすれば、彼ら／彼女らは最初期のコアなシェイクスピア・マニアであり、それと同時に最初期の文学ツーリストである。そして、トマス・シャープはシェイクスピアのブランド力を利用して一儲けした最初の贋作制作者であった。被害者を装うストラトフォード当局と住民たちにしても、詩聖シェイクスピアのブランド力に気付いて最大限に利用しようとする、最初期の観光ビジネス・エイジェントである。1750年代のストラトフォードで奏でられた狂騒曲は、「シェイクスピア崇拝（bardolatry）」の用語で知られる現象における、必ずしもロマンティックでもアカデミックでもない一面を教えてくれる。

2. ファースト・フォリオ価格の暴騰

2020年10月4日のBBCオンライン・ニュースは、当日開催されたサザビーズ・オークションで、シェイクスピアの初版全集（第1・2折り版、ファースト・フォリオ）が1千万ドル（正確には9,980,000ドル）で取引

されたことを伝えた。かりに1ドルを140円で換算すると、1千万ドルは14億円である。レオナルド・ダヴィンチの「サルバトーレ・ムンディ」が4億5千万ドル、セザンヌの「カード遊びをする人々」が2億5千万ドルであることを考えると（*Artpedia*, 1 Dec. 2021）、神格化された劇作家の1千万ドルはお値打ち価格と言えなくはない。ただし、ファースト・フォリオ（第1・2折り版）の名称で知られるシェイクスピアの初版全集は、たかだか中古本である。世界に1冊だけの稀覯本でもなければ、シェイクスピアの自筆サインや書き込みが入っているわけではない。

2001年の時点で、アンソニー・ウェストによって確認された現存するファースト・フォリオの数は228点であったが、この20年間余りで新たに7冊が発見され、2019年の時点では235点に増えている（*kqed.org.com*, 11 Dec. 2019）。記録が残っていないため、全集版が出版された1623年にどれだけの数が刷られたかは不明であるが、チャールトン・ヒンマンの推定によればおよそ1,200部である（Hinman xix）。一方、P. W. M. ブレイニーによれば、「推定750部が現実的と思われ」（ブレイニー34）、今日ではおおむねこの数字が妥当と受け入れられている（West 149; Murphy 51）。理論上、（推定）750部が市場に出回る可能性があるものの、現存する235点のうちかなりの数がフォルジャー・ライブラリーや明星大学などの公共機関に所蔵されているので、ファースト・フォリオがオークションに出品される機会はごく稀になる。ファースト・フォリオの取引が近年、天文学的数字になる背景にはこのような事情があるかと思われるが、取引価格それ自体はある時期から突如跳ね上がり始めた。

先の最高値1千万ドルを付けたファースト・フォリオは、ラスムッセン＆ウェストの『シェイクスピアのファースト・フォリオ—解説付き目録』（2012）において50番を付けられたものであり（Rasmussen & West 220–23）、2020年時点でカリフォルニアの私立大学ミルズ・コレッジが所有していた。この50番は、ジョン・フラーが購入した1757年以降の所有者・購入者をたどることができ、今回以前で、最も新しい取引は1976年

に行われている。サザビーズ・オークションの取引価格は 35,000 ドルの値をつけ、インフレーション計算機を使うと、この数値は現在の 172,900 ドルに相当する。1 ドル＝140 円で換算すると約 2,248 万円になり、1976 年に 2,248 万円で購入したものが、46 年後にはほぼ 60 倍の 14 億円で売却できたのである。さらに時代をさかのぼると、18 世紀半ばから「たられば」の想像力を刺激する一獲千金の魅力的な状況が出現していた。

今日の古本市場で 6 億円や 10 億円という異次元の価格を付けるファースト・フォリオも、18 世紀初めであれば、他の劇作家とそう変わらないお手ごろ価格で入手できた。1699 年 2 月 13 日のロンドンで中古本オークションが開催されたさい、シェイクスピアのファースト・フォリオはチョーサー、ダン、ベン・ジョンソンなど並み居る大詩人の全集を押さえ、中古フォリオの中で最高となる 18 シリングの値を付けた（West 73–75 Appendix I.4, Table I. P.)。ただし最高価格と言っても、2 番目のボーモント＆フレッチャー全集（第 1 フォリオか第 2 フォリオかは不明）がほぼ同額の 17 シリング 6 ペンスであり、ミルトンの『失楽園』も 14 シリングで落札されたことを考慮すれば、アンソニー・ウエストが指摘する通り、シェイクスピアの人気が圧倒的だったとは到底言い難い（West 18)。

エリザベス朝劇作家のなかで、17 世紀に全集版を編まれたのはベン・ジョンソン（F1 1616 年、F2 1640 年、F3 1698 年)、ウィリアム・シェイクスピア（F1 1623 年、F2 1632 年、F3 1663 年、F4 1685 年)、ボーモント＆フレッチャー（F1 1647 年、F2 1679 年）の 3 人（2 人と 1 組）だけである。シェイクスピアの場合は 1623 年から 1698 年まで、都合 4 回フォリオ（2 つ折り版）でロンドンの出版印刷業者から刊行されていた。言うまでもなくファースト・フォリオ（F1）はこの 4 種類の版における初版であるが、これも驚くなかれ、1700 年ごろまで F1 は後の版の F2、F3、F4 よりも中古市場で安い価格で取引されていた（West 18 Table I. A.)。1687 年には、F1 が 8 シリング 6 ペンスというたたき売り価格で取引された例が残っているが、アンソニー・ウェストが推測するところによれば、

この価格は2年前にF4が出版されたためである（West 16–17）。今日、スマートフォンがそうであるように、新しいヴァージョンが出れば古いものは安く売買されるようになり、シェイクスピアのF1もこの時点ではその例外ではなかった。

17世紀を通じて、外典（apocrypha）7作を組み入れたF3とF4がお得感からか人気が高く、比較的高い価格で取引されていた。中古市場におけるF1の標準価格は1700年以降も1750年頃まで、17世紀とそれほど変わらず1ポンド前後だったようで、しかもF2やF3、F4とほぼ同じ価格帯で取引されていた（West 87–88 Appendix I.8, Table I. T.）。それが1750年にF1が標準価格をはるかに上回る10ポンドで取引されてから、18世紀後半期を通じて、F1の取引価格だけが上昇する。1790年代の段階で、完全本のF1価格が21ポンドや35ポンド14シリングを付けたのに対し、100年間の物価上昇にもかかわらず、F2やF3、F4は1700年ごろと変わらず1ポンド前後で購入されていた。

ただし、上記の1750年における10ポンドの取引は価格の言及だけが伝わる、裏付けが取れないものであり（West 79）、実質的な上昇は8ポンド18シリングで「クラッカー・モードント・クラッカーロード」なる人物が購入した1760年前後の取引から始まる（West 80）。この1760年前後の時期に、ファースト・フォリオだけが骨董的価値を持つと見なされるようになり、場合によっては、シェイクスピアの劇作品にはそれほど興味のない骨董ハンター、あるいは値上がることはあっても、値下がることはない安全な資産として資産家などが目をつけるお値打ち品に変わり始めたのである。

シェイクスピアが文学史と演劇史のみならず、娯楽文化全般において群を抜いた知名度を獲得し、神格化されていく現象、さらにはマーケット的にも世界中で多大の興行収益をもたらす超優良コンテンツにのし上がる過程は、ゲアリー・テイラーの『シェイクスピアの再構築（*Reinventing Shakespeare*）』（1989年）やマイクル・ドブソン『国家詩人の生成（*The*

Making of the National Poet)』(1992 年)、ロバート・ヒューム「国家詩人誕生まで—18 世紀初期ロンドンにおける『シェイクスピア』(Before the Bard: “Shakespeare” in Early Eighteenth-century London)」(1997 年)、ドン＝ジョン・ドゥーガスの『シェイクスピアの市場化(*Marketing the Bard*)』(2006 年）などによって、それぞれの関心領域から検証されてきた。ただし、シェイクスピア崇拝（bardolatry）に関してどのような因果関係を想定するのであれ、数量的なデータは新聞・雑誌でのシェイクスピアへの言及回数とか、全集版の種類や売れ行きなど、ごく限られている。ファースト・フォリオ取引価格の推移も数少ない客観的データの 1 つであり、このデータは 18 世紀半ばごろ、娯楽文化における「詩聖シェイクスピア」のブランド力が文学、演劇の領域をはるかに超えて、一般人の間でも飛躍的に上昇したことを示している。

3. シェイクスピアのインチキ伝記情報

ロバート・ヒュームの指摘によれば、シェイクスピア劇上演においてシェイクスピアの名前が冠されて興行されるのは 18 世紀からであり、1700 年以前にはシェイクスピアの看板がつけられていたことを示す明確な証拠は存在しない（Hume 41–43)。そもそもシェイクスピアに関する情報にしても、ジョン・オーブリーのメモ書きやトマス・フラーの断片的な言及が存在してはいたが、シェイクスピアに関する伝記的情報が一般読者に知られるようになるのは、ドン＝ジョン・ドゥーガスが指摘するように 1709 年のロウ編集版全集からである（Dugas 130–31)。1709 年以前の観客や読者は、『ハムレット』など個々の作品やシェイクスピアの名前、あるいは生地がストラットフォードであることなど断片的な情報を知ることができたとしても、この劇作家がどのような環境のもとで、どのような人生を送ったのかについて、誰も具体的な情報を持たなかったのである。

ストラットフォードの郷土史家であるロジャー・プリングルによれば、

1700 年以前にシェイクスピアの生家を訪れた観光客はいたかもしれないが、「その存在を示す記録は残されていない」（Pringle 162）。娯楽文化上の恐るべきブランド力を誇る今日からすると信じがたい話であるが、シェイクスピアの知名度は 1700 年以前には、フォリオ版を購入する一部の知識人を除いてほとんどなく、ましてシェイクスピアの名前で何かが売れることはありえなかった。当然のことながら、今日でいうファンのような存在も 18 世紀初めには存在しなかったはずである。ところが、シェイクスピアの知名度を飛躍的に上げることを可能にする、メディア上の大革新が 1700 年前後に起こることになる。

本来的に演劇批評というジャンルは、出版ビジネスにおいて主力商品になりそうもないものであるが、1699 年に演劇批評をまったく別個の娯楽コンテンツに変えうる画期的な著作物が現れた。ジェラード・ラングベインという人物が 1691 年に『イングランド劇作家の解説』を刊行していたが、ラングベインはその翌年に死去したため、1699 年にチャールズ・ギルドンがこのカタログの全面的な改訂を行うことになる。ギルドンは 1691 年版の（索引を含めて）598 ページを、約 3 分の 1 の 203 ページに圧縮し、作品解説や劇作家の作風解説を大幅に縮小する代わりに、ゴシップや伝説を含めた劇作家の伝記情報を増強した。シェイクスピアを例にとると、その項目は 1691 年度版の 18 ページ（Langbaine 453–71）からわずか 4 ページ（Gildon 126–29）へと圧縮され、『ハムレット』の作品解説（Langbaine 126）も 2 行で片づけられるようになる。

1691 年版『イングランド劇作家の解説』も含めて、ドライデンやライマーなどの演劇批評が読者に想定していたのは劇場に通う演劇愛好家であり、情報として重要なのは作品紹介もしくは解説である。ところが 1699 年版は作品解説を大幅に削る代わりに、劇場には足を運んだことのない読者、あるいは劇場通いそのものに興味がない読者にも楽しめるような情報を盛り込むようになった。こちらもシェイクスピアを例にとると、シェイクスピアその人が読者の関心対象になるような伝記的エピソードが紹介さ

れるようになった。

サー・ウィリアム・ダヴェナント　... オクスフォード州カーファックス近くで王冠の絵看板を掲げた店でワイン商を営むジョン・ダヴェナントの息子。その店には、ウォリックシャーへ頻繁に戻るシェイクスピアがこれまた頻繁に通っていたが、はたして、その店の美しい女主人と良いワインのどちらがお目当てだったのかは、私には判断がつかない。

ウィリアム・シェイクスピア　... 彼はウォリックシャーのストラットフォード・アポン・エイヴォンで生まれ、亡くなった。私は彼が『ハムレット』の亡霊シーンを書いたのは、納骨堂と教会の中庭に隣接する家屋だったと聞かされた。彼は役者にして詩人であり、舞台で演じた役者の中で最も偉大な詩人である。

Sir William D'avenant, ...The Son of John D'avenant, Vintner of Oxford, in that very House that has now the Sign of the Crown near Carfax; a House much frequented by Shakespear in his frequent journeys to Warwickshire; whither for the Beautiful Mistress of the House, or the good Wine, I shall not determine.

(Gildon 32)

William Shakespear, ...He was born and buried in *Stratford* upon *Avon*, in Warwickshire. I have been told that he writ the Scene of the Ghost in *Hamlet*, at his House which bordered on the Charnel-House and Church-Yard. He was both Player and Poet; but the greatest Poet that ever trod the Stage... (Gildon 126)

シェイクスピアにかんする数多くのフェイクニュースが 17 世紀、18 世紀に作られていたが、最初期のダヴェナント私生児伝説もその一つである。サミュエル・シェーンボームの『シェイクスピアの生涯』によると、フェイクニュースの出どころは他ならぬサー・ウィリアム・ダヴェナントの下

ネタギャグであったらしく、このエピソードが初めて活字にされたのが、1699 年のギルドン改訂版である（シェーンボーム 267）。ちなみに、下ネタ系のエピソードが披露されるのはシェイクスピアだけであり、ベン・ジョンソンやボーモント＆フレッチャーの項目には見られない。ギルドン自身の創作の可能性を含めて、「納骨堂と教会の中庭に隣接する家屋」という情報がどこから来たのかは分からないが、やんちゃで下半身が甘い天才という、いかにも愛好家の間で盛り上がりそうな「生身のシェイクスピア」伝説の素地がこの解説から生み出されることになった。

1708 年 3 月 14 日付け『ロンドン・ガゼット』紙に、この新聞のオーナーであり、キットカットクラブの主催者でもあったロンドン出版界のドンである初代ジェイコブ・トンソンが、一般読者にシェイクスピアの伝記に関する新たな情報の提供を呼びかける記事を、「告知」欄の冒頭に掲載した。

> マスター・ウィリアム・シェイクスピアのたいへん優美で正確な全集が、8 折り版の図版付き 6 巻本で出版予定。作業は大詰めを迎え、1 カ月後の出版も可能な段階まで進んでいる。新たな全集版には収集可能な限りの正確な伝記情報と作品解説が収録される。もしこの企画に資する資料をお持ちである読者諸賢が、その資料をグレイズ・イン・ゲイトのジェイコブ・トンソンまでお送りいただければ、新たな情報はこの企画の特筆すべき利点となり、この新版の責任編集者から謝辞を送らせていただく。
>
> Whereas a very Neat and Correct Edition of Mr. William Shakespear's Works, in six Volumes, in Octavo, adorn'd with Cuts, is now so near finished, as to be publish'd in a Month; To which is design'd to be prefix'd as exact an Account of the Life and Writings of the said Author as can be collected: *If* therefore any Gentlemen, who have Materials by 'em, that may be serviceable to the Design,

will be pleased to transmit 'em to Jacob Tonson, at Gray's-Inn-Gate, it will be a particular Advantage in the Work and acknowledg'd as a Favour by the Gentleman who has the Care of this Edition. （*London Gazette* 14th March 1708）

18 世紀初めのイングランド社会には「新聞」というメディア媒体が生み出されており、上記の『ロンドン・ガゼット』もその最初期の 1 誌であった。初代の甥である 2 代目トンソンがサー・リチャード・スティールから 1708 年にその出版権を引き継いでおり（Lynch 90）、初代トンソンはこの新たなメディアを通じて、シェイクスピア全集の斬新なパッケージを宣伝した。上記の広告によると、新たなシェイクスピア全集はコンパクトな「8 折り判型」6 巻本になり、「図版」という視覚的サーヴィス、新たな伝記情報と作品解説、この時点では名前が伏せられた責任編集「紳士」（当代きっての人気劇作家ニコラス・ロウであった）など、斬新な読者サーヴィスが施されることになる。その中でも、初代トンソンが目玉として強調したかったものが、従来の 2 折り版全集には存在しなかった「収集可能な限りの正確な伝記情報と作品解説」である。

この要請に応じて情報提供をしてくれる奇特な読者がいたかどうかは不明であり、おそらくはいなかった。ニコラス・ロウ版シェイクスピア全集第 1 巻の冒頭に掲載された「ウィリアム・シェイクスピア氏の伝記、その他の紹介（Some Acount of the Life & C. of Mr. William Shakespear）」（Rowe i–xl）には、一般読者の投稿に関する謝辞や言及がないからである。ただ、一般読者の範疇には入らないかもしれないが、情報提供者とされる人物は確かに存在した。鹿泥棒エピソード、『ハムレット』の亡霊役など、シェイクスピアの伝説として今日でも言及されるエピソードの多くが、このニコラス・ロウ編集版の伝記で初めて一般読者に紹介されたが、ロウの謝辞によると、その情報提供者は当代随一の大俳優トマス・ベタートンだったからである。

私はとくに彼［トマス・ベタートン氏］に感謝を申し上げたい。私がこれまで読者に伝えてきたシェイクスピアの伝記に関する記述の大部分はベタートン氏によるものであり、氏のシェイクスピアの思い出に対する深い敬意は、氏をわざわざウォリックシャーに赴かせ、尊敬する詩人と関わる所縁のものを探していただいたのだ。

I must own particular Obligation to him, for the most considerable part of Passages relating to his Life, which I have here transmitted to the Publick; his Veneration for the Memory of *Shakespear* having engag'd him to make a Journey into Warrickshire, on purpose to gather up what Remains he could of a Name for which he had so great a Value. (Rowe xxxiv)

エリザベス女王がフォルスタッフをいたく気に入り、彼が登場する作品を直々にシェイクスピアへ依頼したなど、シェイクスピア研究者であれば一度は聞いたことのあるエピソードが、ロウの「ウィリアム・シェイクスピア氏の伝記、その他の紹介」では、シェーンボームの表現によると、「まるで見てきたかのように」次から次へと登場する（ジェーンボーム 113）。

1821 年にエドマンド・マローン編集のシェイクスピア全集がジェイムズ・ボズウェル監修のもとに再版されたさい、ロウの伝記に対するマローンの痛烈な皮肉が収録されていた。

ロウによるシェイクスピアの伝記では 11 の事柄しか言及されておらず、そのわずか 11 にしても、批評的分析を行ってみると、そのうちの 8 つが間違っていることが判明することはかなり留意すべきことである。（大変重要な）1 つの情報には大きな疑問が残り、残る 2 つ（シェイクスピアの洗礼と埋葬）はストラットフォード教区の記録文書に残されているので、間違いなく正しい。

It is somewhat remarkable, that in Rowe's Life of our author, there

are not more than *eleven* facts mentioned; and of these, on a critical examination, *eight* will be found to be false. Of one (of very importance) great doubt may be justly entertained; and the two remaining facts, which are unquestionably true (our poet's baptism and burial), were furnished by the register of the parish of Stratford. (Malone (1821) Vol.2, 69–70)

マローンが批判しているのは、教区記録を調査すれば誰でも分かる生年月日の情報だけが正しく、あとの鹿泥棒や、『ハムレット』の亡霊役でのデビューなど、面白いエピソードはことごとく捏造だったことである。さらに悪質なのは、マローンも 1790 年版で言及しているように、フェイクニュースの出どころであるトマス・ベタートンのストラットフォード調査旅行そのものが、間違いなくヤラセだったことである（Malone（1790）Vol.1, 154）。

ロウ編集版が出版される 1709 年の時点でベタートンは 74 歳であり、その翌年の 4 月 28 日にこの世を去っている。しかも晩年は「10 年以上の間、重い痛風を患って」（Dugas 149）おり、明らかに、彼がストラットフォードまで出かけて精力的に調査を行う体力や余裕は残されていなかった。同時代の読者であれば、トマス・ベタートンの権威によってロウの記述をすべて真に受けたであろうけれども、ケヴィン・ギルヴァリーが論文のタイトルで単刀直入に指摘する通り（Gilvary 1–5）、ロウの伝記はインチキ情報満載の伝記風作者紹介であった。逆説的に言えば、ニコラス・ロウのシェイクスピア伝記が果たした最大の貢献は、劇作品とは別個に伝記情報だけでも楽しめるコンテンツを作ったことにあると言っていい。

文学批評用語で、作家ゆかりの地を探索するコアな文学マニアは「文学ツーリスト（the literary tourist）」と呼ばれる。イギリス「文学ツアー」史の専門家であるニコラ・ワトソンによれば、この娯楽は中世の巡礼をモデルにした「お墓詣で（necro-tourism）」として 18 世紀半ばからイギリ

ス社会に広まっていた。文人墓詣でブームを生み出す起爆剤となったのが、まさしくニコラス・ロウによる上記の伝記であり、この情報によって「ストラトフォードにあるシェイクスピアの墓に対する一般の関心を刺激する」（Watson 33）ようになった。今日のサブカルチャーにおける聖地巡礼に相当する現象が、ヴィクトリア朝イングランド社会でも流行しており、その先鞭をつけたのがシェイクスピア「文学ツアー」であった。

1709 年の時点で、聖地ストラトフォードの「文学ツアー」情報は聖トリニティー教会と内陣の墓だけに限られていたが、1730 年代になると、新たな情報が次々に知られるようになる。2 代目ジェイコブ・トンソンにより、ロウ（1709 年版）とポープ（1725 年版）に続いて 3 人目のシェイクスピア全集編集者に指名されたルイス・ティボルドは、1733 年版の野心的な序文において、ニュー・プレイスに関する詳しい解説を行った後、ニコラス・ロウとの差別化を強調しながら、新情報をこれ見よがしに披露することになる。

> ニュー・プレイスは現在、サー・ヒュー・クロンプトンが所有しており、このやんごとなき紳士のご厚意により、私はシェイクスピアが暮らした屋敷の名誉を高める特別な情報を得ることができ、この情報はニコラス・ロウ氏もおそらく知らないことである。内乱がイングランドで起こり、チャールズ一世の王妃殿下が状況の悪化に伴いウォリックシャーに疎開なさったさい、王妃殿下はこのニュー・プレイスに 3 週間、宮廷を構えられた。という次第で、ニュー・プレイスがストラトフォードで最高の私邸であることは明らかであり、王妃殿下も、王党派ではなかったクーム一族の屋敷よりはこちらを好んだのである。
>
> To the Favour of this worthy Gentleman I owe the Knowledge of one Dwelling-house, of which, I presume, Mr. Rowe never was appriz'd. When the Civil War raged in England, and K. Charles the First's Queen was driven by the Necessity of Affairs to make a

> Recess in Warwickshire, she kept her Court for three Weeks in New-Place. We may reasonably suppose it then the best private House in the Town; and her Majesty preferr'd it to the College, which was in the Possession of the Combe-Family, who not so strongly favour the King's Party. (Theobald xiv)

「内乱期の王妃御用宮廷」という歴史の箔付けも「シェイクスピア御手植え」伝説と並んで、観光地の宣伝としては願ってもない表現である。ただし、フェイクニュースまではいかなくとも、情報源であるサー・ヒュー・クロンプトンが相当に脚色した、かなりの誇張を伴った表現であることは否めない。チャールズ1世王妃のヘンリエッタ・マライアは大陸から帰還し、オクスフォードに駐留するチャールズ1世と合流する途中ストラトフォードに立ち寄り、この町に「3週間」ではなく2日間、おそらく2,000名程度の兵士とともに滞在していた（Edmondson, Colls & Mitchell 132）。この情報によって、ストラトフォードを訪れる「文学ツーリスト」たちの巡礼地には聖トリニティー教会や生家に加えて、詩聖が晩年を過ごした豪華な屋敷ニュー・プレイスが加わることになった。

1730年代、40年代は、シェイクスピアのファン・カルチャーが目に見える形で形成、定着していった時期である（Watson 33–34）。シェイクスピア・レイディーズ・クラブの設立（1736年）、当代きってのセレブ芸術家ジョージ・ヴァーチューのストラトフォード訪問、および土産グッズの走りとなるシェイクスピア像生産（1737年）、ウェストミンスター寺院「詩人コーナー」の実質的な始まりとなったシェイクスピアの胸像と記念碑設置（1741年）など、18世紀前半期のシェイクスピア受容は、作品を観たり読んだりするだけでなく、シェイクスピアその人の情報だけでも十分楽しめる一大娯楽ビジネスへと発展しつつあったのである。

4. ニュー・プレイス取り壊しと桑の木伐採

フランシス・ギャストレルは『イギリス人名辞典（*The Dictionary of National Biography*）』に収録されていないので（同名の別人はいる）、1560年代の時点でフロシャムの聖職者であり、ストラットフォード近郊のリッチフィールドにも邸宅がある（Malone（1821）Vol.2, 522）ということ以外は、この人物の生涯に関する情報は不明である。ギャストレルの収入源が聖職録だけではなかったことは明らかで、彼は1756年にニュー・プレイスを購入した後、立て続けに周辺の地所の借地権を獲得する。ハリウェル＝フィリップスの情報によれば、1758年4月にスパロウ地所（Spurr's estate）、同年8月にクリフォード地所（Clifford estate）と呼ばれる区画に加えて、ギャストレルは1756年にサー・ヒュー・クロンプトンからブリッジタウンという別の通りにある地所の借地権、さらにはニュー・プレイスの「大庭園（the Great Garden）」に隣接するトマス・ウルマーの「納屋と地所」を手に入れた（Halliwell-Phillipps 212–19）。

表向きの職業が聖職者であっても、ギャストレルが祈る不動産屋であったことは否めない。最も確実な資産運用のため、チャペル・ストリートとチャペル・レインに囲まれるストラトフォードの超一等地を、ストラトフォード随一の豪邸ニュー・プレイスを拠点として、その区画全体を「テムズ川沿いのウォーターサイドまで」地上げするつもりだったのである（Halliwell-Phillipps 218）。この聖職者が、納屋や古い家屋など昔をしのばせる共同財産的な建造物を取り壊し、3つの区画とニュー・プレイスを「一まとめにする」ことを目論んでいたことは誰の目にも明らかだった（Halliwell-Phillipps 237）。いよいよ1758年1月23日に、ギャストレルは、その年の半ばに購入することになるニュー・プレイスの隣接区画の更地化を認可してくれるかどうか、ストラトフォード当局との交渉に着手した。ハリウェル＝フィリップスは、その模様を記すストラトフォード当局

の記録を引用している。

> 1758年1月23日、このタウンホールでギャストレル師が（代理弁護人ウィリアム・ハント氏を通じて）、町議会の所有物である、まったく修繕されていない倒壊寸前のチャペル・レインに隣接する3軒の古い納屋を取り壊すことにストラトフォード当局が同意するかどうか、また、この納屋が建っている不動産に関してギャストレル師に与えられた借地権を認可するかどうか、打診してきた。
>
> 23 Jan. 1758. —At this Hall the Rev. Mr. Gastrell (by Mr. Wm. Hunt the attorney) desired to know whether the Corporation would consent that three old barns standing in the Chapell Lane belonging to the Corporation, which are much out of repair and almost ready to fall, may be taken down, and a lease granted to the said Mr. Gastrell of ground adjoyning to the said barns.
>
> (Halliwell-Phillipps 218)

『リーダーズ・シェイクスピア百科辞典』が例となる、従来のシェイクスピア研究で一般的に受け入れられてきたギャストレル像は、180度とまでは言えないにせよ、90度くらいは変えられなければならない。たしかにギャストレルは、桑の木目当てに押し寄せる「観光客にいらだっていた」かもしれないが、けっして短気で偏屈な、浮世離れした人物ではなかった。それどころか、シェイクスピアで有名になりつつあるストラットフォードの一等地に目を付けるという抜群の嗅覚を持ち、明らかに、数年かけて最も効果的に資産価値を上がる計画を用意周到に練っていた。この聖職者が桑の木やニュー・プレイスの家屋を破壊したのは、おそらく衝動的にではなかった。この人物は代理弁護士を介在させ、当局と交渉しながらニュー・プレイス一体の広い区画の地上げをめざしていたからである。

反対に、ストラトフォード当局と住人たちは、今日に伝わる史料では、

常にギャストレルによる「蛮行」の被害者であり、偏屈で傲慢な冒瀆者に対する懲罰者として描かれている。1780 年に最初のギャリック伝を刊行したトマス・デイヴィーズは、ストラトフォードを立ち去るさいにギャストレルが受けた屈辱的な送迎を以下のように記している。

> …ストラトフォードの住人たちは、桑の木伐採という神聖冒瀆の行為に悲しみと驚きに包まれ、ギャストレルの破滅以外には住人たちの怒りのやり場はなかったであろうと思われるほど激怒した。この哀れな犯罪者はストラトフォード住人の怒りを避けるため、人目を忍ぶように生活せざるを得なくなり、ついには、同じ名前のやつは 2 度とこの町には住ませないと厳かに誓う住人たちから呪いを浴びせられるなか、ストラトフォードを立ち去る羽目になった。
> …the people of Stratford were seized with grief and astonishment when they were informed of the sacrilegious deed; and nothing less than the destruction of the offender in the first transports of their rage would satisfy them. The miserable culprit was forced to skulk up and down to save himself from the rage of the Stratfordians; he was obliged at last to leave the town amidst the curses of the populace, who solemnly vowed never to suffer onenof the same name to reside in Stratford. (Halliwell-Phillipps 223)

この記述のように、今日に伝わる記録では、怒る側はことごとくスラトフォード当局と住人たちである。ところが、唯一ギャストレルの行動に理解を示すハリウェル＝フィリップスの指摘に耳を傾けると、加害者と被害者の関係を入れ換えることも可能になる。

1758 年 1 月にギャストレルとストラトフォード当局の間で下交渉が行われた後、当局側は投資家ギャストレルには受け入れがたい条件を突き付けてきた。当局は、ギャストレルに対して今後「不動産税およびあらゆる

種類の賦課金」をストラトフォード町に納付することを求め、さらに納屋など不動産評価や登記に必要な費用経費の負担を要求してきた。加えて、借地権認可にあたっては、99 年間の保有権が認められる代わりに「年間 5 ポンドの地代」が新たに請求されることになった（Halliwell-Phillipps 219）。

ギャストレルに課せられる新たな地代「年間 5 ポンド」はインフレーション計算機を利用して現在の価値に換算すると 512 ポンドに相当し、1 ポンド 180 円で計算すると邦貨で約 9 万円になる。今日の感覚からすると大した額ではないように思えるが、ギャストレルは受け入れず交渉は決裂した。ギャストレルは進捗状況に自信があったのか、1758 年 4 月と 8 月にスパロウ地所とクリフォード地所の借地権購入を立て続けに行った。

それにしても、なぜギャストレルはストラトフォード当局の要求をのまなかったのだろうか？ハリウェル＝フィリップスは交渉決裂の原因についていっさい言及していないが、トラブルの原因は借地の又貸しにあったように思われる。孫借り人であるギャストレル側にすれば、借地の地代（rent）はスパロウ一家やクリフォード一家など元の借地権保有者に支払えばいいだけの話である。ところが、町当局は町にも納付せよという二重払いを求めてきた。しかも、今日の住民税および種々の課税にあたるものが、本拠地のリッチフィールドでの徴収とは別個にふり懸かる恐れもあった。逆にストラトフォード側からすれば、ギャストレルは自分たちの土地を買い漁るだけ買い漁り、それでいて財政の面でも人的貢献の面でも、なんの還元も行なわない不埒なよそ者である。ストラトフォード住人の立場に立てば、ギャストレルの不動産投資には目をつぶるにしても、自分たちの土地でマネーゲームをやる以上、ギャストレルに何かしらの代償を求めたくなるのは当然のことだった。

両者の交渉は一時期膠着状態に陥っていたようだが、ギャストレルがクリフォード地所を買い上げた 1 か月後の 1758 年 9 月、ついにストラトフォード当局はギャストレルのニュー・プレイス地区再開発計画に対し、事

実上の不認可を通告してきた。ギャストレルはブリッジタウンという別の地域の不動産借地権を、将来的にニュー・プレイス地区のどこかと等価交換するつもりで購入していたが、ストラトフォード当局はギャストレルに、当局の許可なく借地権の譲渡が行われているという理由で譲渡を無効とし、ギャストレルの借地権を没収する旨を通知してきた（Halliwell-Phillipps 222）。こちらの例も明らかに又貸しがトラブルの原因であり、ギャストレルは元の借地権者であるサー・ジョン・クロンプトンの縁戚者から孫借りで借地権を購入し、しかも、ギャストレルは借地権有効期間の地代を全額支払っていた。正式に譲渡無効の通達が行われたのは、さらに1年後の1759年11月27日である。

結果からすると、ストラトフォード当局による借地権没収は嫌がらせそのものとも言え、1760年1月に、ギャストレルはこの行政処分に対して「法的効果に異議を申し立て（demur）」、衡平裁判所に訴状（the bill of complaint）を送った。ギャストレルの不服は認められ、ストラトフォード当局は訴訟費用すべてを支払わなければならなかった（Halliwell-Phillipps 222）。一方、ストラトフォード側に立てば、腹いせとか専横と呼ばれることになっても、何かしらの懲罰を与えなければ腹の虫がおさまらない事情があった。1758年9月から1759年11月の期間、おそらく別々の時期に、ギャストレル夫妻はまず桑の木を伐採し、そして自分たちの夢を壊したストラトフォード当局に対する最終的な報復のためなのか、あるいは既定路線なのか不明ではあるが、ニュー・プレイスの家屋を跡かたもなく倒壊させた。

個人的な推測ではあるけれど、18世紀半ば以降において、カントリーハウス建設や風景庭園設計が支配階級によるステイタス誇示の定番となっていたことを考えると、ギャストレルの頭の中では、庭園の樹木伐採や建物の撤去による更地化は既定路線だったかもしれない。通常の再開発計画であれば、雇用機会の増進から地元には歓迎される事業だったかもしれないが、ギャストレルが破壊したものはストラトフォード住人ばかりでなく、

文芸愛好家の宝だった。1760年春にストラトフォードを「文学ツアー」で訪れた女性は、残骸が残る無残な跡地を嘆き、ギャストレルの行為を糾弾する記述を以下のように残している。

> この優雅な家屋［ニュー・プレイスの屋敷］と樹木［桑の木］はこの町に多大の名声、さらには多くの見物客と金銭的利益をもたらしたけれども、*腹立ちまぎれに*、この男［ギャストレル］が家屋を石材一つ残らないように打ち壊し、桑の木を伐採して薪用に積み上げ、ストラトフォード住民の激しい怒りと当惑、失望を買うことになった。しかしながら、正直者の銀細工師が薪となった桑の木の残骸をすべて買い取り、この木材から知識欲が強い客のために、多くの珍品を制作してくれ、私もそのうちのいくつを買って帰るつもりである。
>
> As the curiosity of this house and tree brought much fame, and more company and profit to the town, this man, *on some disgust*, has pulled this house down, so as not to leave one stone upon wood, and cut down the tree, and piled it as a stack of firewood, to the great vexation, loss, and disappointment of the inhabitants. However, an honest silversmith bought the whole stack of wood, and now makes many odd things of this wood for the curious, some of which I hope to bring with me to town.
>
> (Halliwell-Phillipps 223)

ハリウェル＝フィリップスによって引用されているこの記述が、ギャストレルの「蛮行」伝説の第1号と思われるが、同時に、この資料は、スキャンダルや場外乱闘の類が起こるごとに世間の耳目が集まり、シェイクスピアやストラトフォードの知名度が飛躍的に高まっていくというシェイクスピア・ビジネスの未来を予告していた。

シェイクスピア本人のお手植えと伝わるものではあったらしいが、くだ

んの桑の木が本当に 150 年前に劇作家によって植えられたものであるかは分からない。ただ、すぐ後で紹介するトマス・デイヴィーズの記述が示すように、ニュー・プレイスの桑の木は実際、150 年間その場所で生育していたらしく、オーク並みの巨木に成長していた。ハリウェル＝フィリップスは、ギャストレルの伐採は老齢による倒木と家屋の損壊を恐れての措置であった可能性を示唆しているが（Halliwell-Phillipps 225）、伐採は更地化の前段階として、当初からの予定だったかもしれない。結果として、桑の木伝説がギャストレルによる伐採以前から広まっていた形跡はなく（Halliwell-Phillipps 223–24）、むしろギャストレルとのトラブルを機に伝説が拡散された可能性が高い。

ギャストレル「蛮行」伝説を作り、観光客たちに繰り返し吹き込むことによって、ニュー・プレイス消滅の情報を文芸愛好家たちに口伝えで拡散させたのがストラトフォード当局であったことは間違いない。ギャストレルがストラトフォードを立ち去った 20 年後の 1780 年、ストラトフォード当局が作り上げた「聖遺物破壊事件の経緯」はほぼそのまま活字化されることになる。ギャリック伝の執筆者であるトマス・デイヴィーズは、以下のように桑の木伐採の経緯を語っている。

> 詩人自らの手で植えられた桑の木は、この野蛮な所有者によって嫌悪の対象となったが、それは、この巨木のおかげで自分の部屋が暗くなり、家屋全体が湿気で蔽われると彼が思い込んだからである。不幸にも、この哀れな聖職者は桑の木の伐採を命じた。
>
> The mulberry-tree, planted by the poet's own hand, became an object of dislike to this tasteless owner of it, because it overshadowed his window, and rendered the house, as he thought, subject to damps and moisture. In an evil hour the unhappy priest ordered it be cut down. (Davies 214)

本論の冒頭で紹介した『リーダーズ・シェイクスピア百科辞典』における「フランシス・ギャストレル」の記述は、ほぼそのままの形でこの証言をもとに書かれており、違いは桑の木が伐採されるに至る原因だけである。百科事典では「旅行客にいらだったギャストレルは、シェイクスピアが植樹したと伝えられる桑の木を伐採し、敷地から取り除くよう命じた」と記されているが、1780 年におけるデイヴィーズの記述では、ニュー・プレイスに押し寄せる観光客への言及はまだ見られない。

観光客云々の情報が出回るのはさらに 10 年ほど後、ジョン・ジョーダンという曰くつきの自称郷土史家が「桑の木グッズの歴史に関する奇妙な説明」（Halliwell-Phillipps 233）を拡散させるようになってからである。ジョーダンによれば、桑の木を一目見たいという「旅行客の嘆願に飽き飽きして... ギャストレルは桑の木を伐採するよう邪悪極まりなく命じた」（Halliwell-Phillipps 233）。1790 年代、1800 年代はシェイクスピアの贋作・偽造文書・フェイクニュースの全盛期であり、シェイクスピア研究者にはおなじみの贋作者ウィリアム・ヘンリー・アイアランドがストラットフォードを訪れ、「さまざまな大発見」をしたのもこの時期である。アイアランド一人が贋作者の汚名を受けてはいるが、ストラットフォードで彼の案内役を務めたのがこのジョン・ジョーダンであった。

ジョン・ジョーダンのようなシェイクスピア情報専門の観光ガイドの出現は、1770 年あたりから、生地ストラットフォードの環境がごく平均的な地方の市場町から一大観光地へと激変しつつあることを雄弁に物語っている。ジョーダンが発生源らしい典拠不明の情報はハリウェル＝フィリップスなどによって列挙されているが（Halliwell-Phillipps 19–22；シェーンボーム 112；大場 48–51；ピアス 51–53）、明らかに「押し寄せる観光客」もシェイクスピア伝説をより面白くするフェイクニュースの 1 つである。ところが、ギャリック主催でシェイクスピア生誕 200 周年祭がストラットフォードで催された 1769 年以降、ほんとうに観光客がこの生地／聖地に押し寄せてくるようになったのである。

ギャストレルの「蛮行」伝説が完成形で広まるのは、ジョーダンやアイアランドの登場からさらに 20 年ほどが経ってからになる。1821 年に刊行されたボズウェル＝マローン版シェイクスピア全集に収録されたエドマンド・マローンの「シェイクスピア伝」は、フランシス・ギャストレルを、聖職者にはおよそふさわしくない血も涙もない吝嗇の冷血漢として描いている。

> ニュー・プレイスはサー・ヒュー・クロプトンの女婿であり、遺言執行者であるヘンリー・トールボット氏によって 1752 年、もしくはその直後に資産家のギャストレル師に売却されたが、ギャストレル師はストラットフォードの住人たちとの諍いから数年しかこの屋敷に住まなかった。この町の家屋で、年間 40 シリング以上で貸し出されているか、あるいはそのように資産評価されているものすべては、物件の資産価値と居住者の能力に応じて、教区民生委員によって決められた月額を支払うように取り決められていた。ギャストレル氏は一年のある期間をリッチフィールドで暮らしていたので、自分に割り当てられた救貧税が高すぎると考えたが、ストラットフォードの行政者たちは、ギャストレル氏の不在期間でも召使たちがこの屋敷に居住しているという理由から、ギャストレル氏は割り当ての全額を支払うべし、と至極当然の命令を出した。それを聞いたギャストレル氏は激怒し、この屋敷は二度と救貧税評価を受けさせないと宣言して、すぐさま家屋を打ち壊し、残った資材をすべて売却してこの町を去った。
> The New Place was sold by Henry Talbot, Esq. son-in-law and executor of Sir Hugh Clopton, in or soon after the year 1752, to the Rev, Mr. Gastrell, a man of large fortune, who resided in it but a few years, in consequence of a disagreement with the inhabitants of Stratford. Every house in that town that is let or valued at more than 40*s*. a year, is assessed by the overseers, according to its

worth and the ability of the occupier, to pay a monthly rate toward the maintenance of the poor. As Mr. Gastrell resided part of the year at Lichfield, he thought he was assessed too highly; but very properly compelled by the magistrates of Stratford to pay the whole of what was levied on him, on the principle that his house was occupied by his servants in his absence, he peevishly declared that *that* house should never be assessed again; and soon afterwards pulled it down, sold the materials, and left the town.

（Malone（1821）Vol.2, 522–23）

この引用の救貧税云々という「蛮行」の原因もジョーダン由来の情報と思われるが、今となってはこの因果関係が正確なのか、ジョーダンならではの創作なのかは分からない。かりにこれがジョーダンの作った聖地伝説の1つだとしても、このエピソードの内容は、18世紀イングランド社会における典型的な地方町としてのストラットフォードの窮状を物語ってくれる。

5. フェイクニュースの歴史化

18世紀イングランドの地域社会という脈絡から眺めてみると、ギャストレルの「蛮行」そのものが、シェイクスピア事典などで説明されてきたものとはかなり異なって見えてくる。18世紀イングランド社会史でしばしば指摘される現象であるが、「囲い込みと農業の変革」（ブリッグズ 272）、さらには「みごとな眺望を持つ新築のカントリーハウス」（ブリッグズ 280）が18世紀イングランド農村部の風景を一変させていた。ところが工業と農業におけるテクノロジー革新の恩恵は、少なくとも18世紀にはストラットフォードに及ばなかった。

18世紀の人口動態については8種類の推定値が存在し（Mitchell 7–20）、代表的なリグリー＆スコフィールドの統計（1981年）によると、イング

ランドとウエールズの推定総人口は、1701 年の 505.8 万人から 1801 年の 827.8 万へと、100 年間でおよそ 164% 増加している（Mitchell 7–8）。一方、時期が異なるので正確な比較にはならないが、ウォリックシャーの救貧制度を研究するジョウン・レインの推定によると、1670 年代のストラットフォードにはおよそ 400 世帯の 1,700 人が生活していた。130 年後の 1801 年に行われた最初の国勢調査は、ストラットフォードの総人口を 2,418 人にとどまり（Lane 126）、130 年間で人口増加は全国を下回る 142% であった。同様な傾向はロバート・ウィーラーの言及からも裏付けることができ、1765 年 4 月 19 日の実施された調査によると、その時点におけるストラットフォードの世帯数は 552 であり、総人口は 2,287 人であった（Wheler 16–17）。

一年中世界中からの観光客であふれかえる今日の光景からは想像もできないが、ギャストレルの「蛮行」伝説が生まれた 1750 年代、60 年代のストラットフォードは、繁栄してはいないが「危機的（critical）」でもないという、ごく平均的な中規模の市場町であったのである。もちろんこの時期の平均的な農村部の町に典型的な問題がストラットフォードにも起こっており、18 世紀半ばの時期に町の主要収入源であったフェア（市）の回数が年間 3 回に減って、交通量も商取引の量も減少し、市内の家屋の 10 軒のうち 1 軒が空き家となっていた（Bearman xix–xx）。シェイクスピアの父ジョンがかつて就任した参事会議員（alderman）や理事（burgess）など有力者の証となる役職も、1730 年代からしばしば空席となっていた。ストラットフォード史を編纂したロバート・ベアマンによると、「18 世紀ストラットフォードの全体的な印象は衰退とまでは言えないにしても、スタグフレーション［不況中のインフレ］に見舞われた町である」（Bearman xx）。

税収入の確保が至上命題のストラットフォード当局にとって、フランシス・ギャストレルのような富裕者は税収の観点から最も歓迎される移住者であったはずである。一方のギャストレルにとっても、ストラットフォー

ド中心部での不動産購入と再開発は資産運用において最も確実であり、見込みのあるビジネスであっただろう。この背景を考えると、なぜストラットフォード当局がギャストレルに対し、種々の税金や手続き料をことあるごとに要求したのかが理解できる。一方、ニュー・プレイス以外にリッチフィールドの邸宅を所有するギャストレルにとって、なぜこの種の要求が理不尽な二重請求に思えたのかも同様に理解できる。先に上げた「救貧税」支払いのトラブルにしても、工業化や農業改良という社会変化に乗り遅れ、救貧などの社会問題対策に財政的に苦慮しつつあるミッドランドの地方町と、資産価値を高めるため、お値打ち価格の不動産をバラバラで購入し、まとめて更地に整備することを目指す投資家との間であれば、ボタンの掛け違いは起こるべくして起こった。

ハリウェル＝フィリップスの『ニュー・プレイスの歴史解説』など、ストラットフォードの歴史を紹介する場合には必ずと言ってよいほど利用されるのが、1759年にサミュエル・ウィンターが作成した「ストラットフォード地図」であり、この地図は18世紀半ばの時点で、ストラットフォード市内には、教会等の歴史的な建造物などハード面はもちろん、宿泊施設や交通網など観光ビジネスのインフラもほとんど整備されていなかったことを視覚的に示している（宿泊施設は26番の白獅子亭だけである）。観光名所の有力候補があるとすれば、地図上の16番の「シェイクスピアが亡くなった家（The house where died Shakespeare）」と18番の家屋「シェイクスピアが生まれた家（The house where was Shakespeare born）」であったが、前者はウィンターがこの地図を作製した同じ年にこの町から消え失せてしまった。1759年の時点で残されたシェイクスピアゆかりの建物は、18番の生家と“Church”とだけ記された聖トリニティー教会内の墓だけだと言っていい。歴史の皮肉なところは、貴重な文化遺産の喪失が新たな（その多くは胡散臭い）観光名所の創出へとストラットフォードの未来を向かわせたことである。

ストラットフォードの観光地化はちょうどギャストレルの「蛮行」直後

から、民間ベースで推進されていた。1750 年代のある時期にジョン・ペイトンという人物が白獅子亭（the White Lion）という宿泊施設を設けていたが、1762 年 2 月刊行の『ブリティッシュ・マガジン』に掲載された記事は、このペイトンがストラットフォードを訪れる観光客のガイドを行っていることを伝えている（Chambers II 286）。先に引用した 1760 年春の「文学ツアー」客が証言する通り、伐採された桑の木は銀細工師のトマス・シャープによって買い上げられ、「小さなトランクや嗅ぎ煙草入れ、紅茶箱、皿置き、タバコ詰め具など」（Davies 215）、「知識欲が強い客のために、多くの珍品」に変身した（Halliwell-Phillipps 223）。先に引用した観光客の目には、トマス・シャープが「正直者の銀細工師」に映ったかもしれないが、この商売人は「多くの」どころか、「夥しい」とか「数限りない」という形容が適切なほど、この土産グッズを観光客相手に売りさばいた。そして、いよいよ 1767 年にストラットフォード当局は、先行きが真っ暗な生羊毛の取引中継地から観光都市へと舵を切ることになる。

今日、ストラットフォードの町庁舎（Town Hall）はニュー・プレイスと同じく区画に存在するが、現在の庁舎は以前の建物が「危険なほど老朽化」したため、1767 年に解体して新たに立て直したものである（Morris, *theshakespeareblog.com*）。通常であれば、町民から寄付を募って粛々と施工すればよいだけのことであるが、ストラットフォード当局は明らかに新庁舎を、破壊された聖地の代わりとなる新たなシェイクスピア名所に仕立てようとした。しかも、新聖地のお披露目にあたっては、演劇界のレジェンドであるデイヴィッド・ギャリックを引き込もうとしたのである。ギャリック評伝の作者、トマス・デイヴィーズはギャリックがストラットフォード当局から桑の木グッズの贈り物とある魅力的な提案を受けたことを記している。

> ストラットフォード当局は、この人物［トマス・シャープ］が製作したみごとな桑の木工芸品を数点購入し、洗練された判断と趣味を持つ人間

の意見に促されて、この聖なる木材で制作された小箱にストラットフォード名誉市民任命書を入れ、これをギャリック氏に送った。同時に、彼らはたいへん丁寧な言葉遣いでギャリック氏に、彼が敬愛するシェイクスピアの胸像か立像、あるいは肖像画を提供してほしい、ストラットフォード当局はそれを町庁舎に飾るつもりだ、と伝えてきた。その書簡では、同じく丁寧な言葉遣いで、当局はギャリック氏に、もし彼自身の肖像画を寄贈してもらえればさらにありがたい、その肖像画をシェイクスピア像の隣に配置し、2 人の名声を永遠にとどめたいと言ってきた。

The corporation of Stratford bought several of this man's curious manufacture of the mulberry-tree; and influenced by good sense and superior taste, they inclosed the freedom of Stratford in a box made of this sacred wood, and sent it to Mr. Garrick; at the same time they requested of him, in very polite terms, a bust, statue, or picture of his admired Shakespeare, which, they informed him, they intended to place in their town-hall. In the same letter, which in equal politeness, they assured him, that they should be no less pleased if he would oblige them with his own picture, to be placed near to that of his favourite author, in perpetual remembrance of both. (Davies 215–16)

もちろんストラットフォード当局がいきなり当代きってのセレブ俳優に書簡を送ってきたわけではなく、町庁舎の家屋が完成した 1767 年の後半から、ストラットフォード町議会の有力者であるフランシス・ウィーラーという人物を中心に、デイヴィッド・ギャリックとのコラボ企画が練られていた（Halliwell-Phillipps 232–233）。今日で言えば「シェイクスピアの町ストラットフォード」キャンペーンであり、ストラットフォード当局はギャリックに観光大使を打診したのである。

まったく衰えることのないシェイクスピア人気を目の当たりにして、

1768 年、ストラトフォード当局はシェイクスピア観光に自分たちの未来を託すという重大な決断を下した。1768 年の 10 月、ストラットフォード町議会はデイヴィッド・ギャリックを「名誉市民」に任命し、シェイクスピアゆかりの品を贈るという議案を可決した（Davies 215–16; Halliwell-Phillipps 232–233）。

この依頼において、「聖地破壊」からの蘇りという新たなシェイクスピア伝説のため象徴的な役割を担わされたのが、1768 年の時点でも残っていた（とされる）くだんの桑の木である。ストラトフォード当局は、55 ポンドをかけて「桑の木」箱を特注し、「桑の木製のシェイクスピア像」など、数点の桑の木グッズをギャリックに贈った（Davies 215; Halliwell-Phillipps 232）。これをきっかけとして 1 年後、ギャリック主催により 1769 年 9 月 6 日から 8 日までの 3 日間、最初のシェイクスピア生誕記念祝典がストラトフォードで催されることになった。マイクル・ドブソンが指摘するところによれば、ギャリック主催の生誕 200 周年記念は「イギリスの国家的アイデンティティーの象徴としてのシェイクスピア礼賛」（Dobson 185）のクライマックスであるけれども、ギャストレル「蛮行」伝説は、シェイクスピアの神格化を強化する過程で（シェイクスピア・ブランドをより発展させる過程で、と言い換えてもいい）、桑の木グッズをストラットフォード当局お墨付きの公認グッズとするという計算高い一面や、ストラットフォードあげて公然と私的リンチを行うという陰湿な一面も存在していたことを教えてくれる。

5. 結び

イギリス演劇ビジネスにおけるシェイクスピアの 1 強時代は、出版界のドンであるジェイコブ・トンソンにより画期的なフォーマットで全集版が刊行された 1709 年の段階から、すでに始まっていた（中野 15–18）。演劇マニアをはるかに超えて、地方の文芸愛好家や知識人、イギリス社交界全

体にまでシェイクスピアの知名度を拡げることに貢献したのは、ポープ版の天衣無縫な編集をめぐり、ルイス・ティボルドとアレグザンダー・ポープで交わされた1726年から始まる大喧嘩である（Murphy 66–76）。そしてシェイクスピア・ブランドの経済的効果を飛躍的に高めたのが1760年代、シェイクスピア・ビジネスの拠点としてストラトフォードが観光都市化に舵を切った時期である。

今日に至るまでシェイクスピア辞典や聖地ストラトフォードの観光案内、ひいてはシェイクスピア批評そのものにおいて、常に聖遺物破壊者として悪魔化されてきたフランシス・ギャストレルにも疑いなく言い分はあったはずである。ただし、ギャストレルの「蛮行」にも擁護すべきさまざまな動機や背景があったことは、勇気ある唯一の理解者であるジェイムズ・ハリウェル＝フィリップスによってかなりの部分がすでに指摘されている。言い換えれば、本論で紹介した事実の大半も、ハリウェル＝フィリップスの著書を通じて、シェイクスピア研究者の誰もが知りうるし、知っているはずのことばかりなのである。シェイクスピア研究者はこの250年間、シェイクスピア崇拝に背を向けた不動産投資家に対する熱狂的崇拝者たちの私的リンチに目をつぶり続け、シェイクスピア・ブランドの毀損には一切関わろうとはしなかった。

［本論文はJSPS科研費・基盤研究B「エリザベス朝英国史劇における民衆のイングランド王国表象」（研究代表者・中野春夫／課題番号21H00511／研究期間R3–R6）、JSPS科研費・基盤研究B「『シェイクスピア崇拝』と18世紀イングランド娯楽ビジネス」（研究代表者・佐々木和貴／課題番号20H01242／研究期間R2–R5）、JSPS科研費基盤研究B「エリザベス朝演劇における劇作家の仕事」（研究代表者・篠崎実／課題番号23H00612／研究期間R5–R8）およびJSPS科研費、基盤研究B「娯楽文化史からとらえるエリザベス朝演劇―社会変化が生み出す総合エンターテイメント」（研究代表者・篠崎実／課題番号19H01238／研究期間R1–R4）の助成を受けた成果である。］

引用文献

Bearman, Robert. “Introduction”, *The History of an English Borough: Stratford-upon-Avon 1196–1996*, Ed. Robert Bearman. Strout: Sutton Publishing, 1997. pp. xiii–xxii.

Davies, Thomas. *Memoir’s of the Life of David Garrick, Esq.: Interspersed with Characters and Anecdotes of his Theatrical Contemporaries*. (1780) The Cambridge Library Collection. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.

Dobson, Michael. *The Making of the National Poet: Shakespeare, Adaptation, and Authorship, 1660–1769*. Oxford: Oxford University Press, 1992.

Dugas, Don-John. *Marketing the Bard: Shakespeare in Performance and Print, 1660–1740*. Columbia: University of Missouri Press, 2006.

Edmondson, Colls & Mitchell. *Finding Shakespeare’s New Place: An Archaeological Biography*. Ed. Paul Edmondson, Kevin Colls & William Mitchell. Manchester: Manchester University Press, 2016.

Gaga, Jeffrey M. “Copyrighting Shakespeare: Jacob Tonson, Eighteenth Century English Copyright, and the Birth of Shakespeare Scholarship.” *Journal of Intellectual Property Law*. Vol. 19 Issue 1 (2011). pp. 21–63.

Gildon, Charles. *The Lives and Characters of the English Dramatick Poets. First begun by Mr. Langbaine, improv’d and continued down to this Time, by a careful Hand*. London: Nicholas Cox, 1699.

Gilvary, Kevin. “Who Wrote the First Shakespeare Biography? It was not Nicholas Rowe in 1709!”. *Shakespeare Oxford Fellowship. Brief Chronicles* VII. 2016. pp. 1–15.

Halliwell-Phillips, James. *An Historical Account of the New Place, Stratford-upon-Avon, the Last Residence of Shakespeare*. London: G. E. Adlard, 1864.

Hinman, Charlton. *The Printing and Proof-Reading of the First Folio of Shakespeare*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1963.

Hume, Robert D. “Before the Bard: “Shakespeare” in Early Eighteenth Century London”. *English Literary History*. Vol. 64 (1997), pp.41–75.

Langbaine, Gerard. *An Account of the English Dramatick Poets*. London: George West and Henry Clements, 1691.

Lockwood, Thomas. “*The Works of Ben Jonson* (1716–17): Textual Essay”. The Cambridge Edition of *the Works of Ben Jonson*—Online. Cambridge University Press. 2014.

Lynch, Kathleen M. *Jacob Tonson, Kit-Kat Publisher*. Knoxville: University of

Tennessee Press, 1971.

Malone, Edmund, ed. *The Plays and Poems of William Shakespeare*. 21 vols. London: F. C. and J. Rivington; 1821.

— *The Plays and Poems of William Shakespeare, in Ten Volumes*. 10 vols. London: J. Rivington and Sons, 1790.

Murphy, Andrew. *Shakespeare in Print: A History and Chronology of Shakespeare Publishing*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.

Pringle, Roger. "The Rise of Stratford as Shakespeare's Town", *The History of an English Borough: Stratford-upon-Avon 1196–1996*, Ed. Robert Bearman. Strout: Sutton Publishing, 1997. pp. 160–174.

Rasmussen & West. *The Shakespeare First Folio: A Catalogue*. Ed. Eric Rasmussen & Anthony James West. London: Palgrave Macmillan, 2011.

Reader's Encyclopedia of Shakespeare, the. Ed. Oscar James Campbell & Edward Quinn. New York: Crowell, 1966.

Rowe, Nicholas, ed. *The Works of Mr. Shakespear; in Six Volumes*. London: Jacob Tonson, 1709.

Smith, Emma. *Shakespeare's First Folio: Four Centuries of an Iconic Book*. Oxford: Oxford University Press, 2016.

Stone, George Winchester, Jr. "Shakespeare in the Periodicals, 1700–1740: A Study of the Growth of a Knowledge of the Dramatist in the Eighteenth Century, Part 1". *Shakespeare Quarterly*, Vol.2（1951）. pp. 221–31.

— "Shakespeare in the Periodicals, 1700–1740: A Study of the Growth of a Knowledge of the Dramatist in the Eighteenth Century, Part 2". *Shakespeare Quarterly*, Vol.3（1952）. pp. 313–28.

Taylor, Gary. *Reinventing Shakespeare: A Cultural History from the Restoration to the Present*. Oxford: Oxford University Press, 1989.

Theobald, Lewis. *The Works of Shakespeare: in Seven Volumes. Collated with the oldest copies, and corrected; with notes, explanatory, and critical: By Mr. Theobald*. London: A. Bettesworth, 1733.

Watson, Nichola J. *The Literary Tourist: Readers and Places in Romantic & Victorian Britain*. Basingstone: Palgrave Macmillan, 2006.

Wells, Stanley, *Shakespeare: An Illustrated Dictionary*. Oxford: Oxford University Press, 1978.

West, Anthony James. *The Shakespeare First Folio: The History of the Book: Vol. I. An Account of the First folio Based on Its Sales and Prices, 1623–2000*. Oxford: Oxford University Press, 2000.

Wheler, Robert Bell. *History and Antiquities of Stratford upon Avon*, London: J. Ward, 1806.
大場、健治『シェイクスピアの贋作』、岩波書店、1995 年
金子、雄司「編纂者ニコラス・ロウへの道―フォリオ版からオクタボ版へ―」、中央大学『人文研紀要』、第 90 巻（2015 年）、17–39 頁。
『研究社シェイクスピア辞典』、高橋康也、大場健治、喜志哲雄、村上淑郎編、研究社、2000 年
シェーンボーム、サミュエル『シェイクスピアの生涯―記録を中心とする』小津次郎・柴田稔彦・村上淑郎・成田篤彦・高村忠明訳、紀伊国屋書店、1982 年。
中野、春夫「シェイクスピア・ビジネスの誕生―ジェイコブ・トンソンとニコラス・ロウ編集版テクスト（1709 年）」、『学習院大学文学部研究年報』、第 66 号（2020 年）、15–43 頁。
ピアス、パトリシア『シェイクスピア贋作事件―ウィリアム・ヘンリー・アイアランドの数奇な人生』高橋進訳、白水社、2005 年
ブリッグズ、エイサ『イングランド社会史』今井宏、中野春夫、中野香織訳、筑摩書房、2004 年
ブレイニー、ピーター・W. M.『シェイクスピアのファースト・フォリオー偶像となった書物の誕生と遍歴』、五十嵐博久訳、水声社、2020 年